

した。大平村の満族と琿春の満族の間には何の関係もない。私は満洲語も知らないし、八旗の旗色も判らない。我々には満族独自の習慣はなく、朝鮮族や漢族と同じ習慣で過ごしている。＜鉄姓＞にシリママもフオトママもない。

哈達門は元来、頭道溝と呼んでいた。ここを流れている川も頭道溝と言う。哈達門という呼び方は＜満洲国＞時代からであろう。＜私たちの国＞は＜孫中山＞によっておしまいになった。

〈特集 2〉

中国第一歴史檔案館所蔵

『錦衣衛選簿 南京親軍衛』について

松 浦 章

1 はじめに

北京・故宮西華門内にある中国第一歴史檔案館には1千万件ともいわれる清代檔案が所蔵されているが、龐大な清代の檔案の数量には劣るものの明代の檔案も約3千数百件所蔵されているとされる（『中国第一歴史檔案館館蔵檔案概述』檔案出版社、1985年6月、3頁参照）。その明代の檔案のなかに兵制に関する重要な史料として「武職選簿」、「衛所武職選簿」等と略称される多くの簿冊が含まれている。以下、その一部を簡単に紹介したい。

2 中国第一歴史檔案館所蔵の「武職選簿」

中国第一歴史檔案館所蔵の「衛所武職選簿」は、下の目録にあるように103に分類され、その簿冊総数は111冊である。たとえば86の『錦衣衛選簿 南京

親軍衛』をみると、同選簿のなかには永楽帝によって西洋諸国に派遣された太監鄭和にしたがった錦衣衛等の事績を簡略ながら知ることのできる記事がみられる。

この史料の存在をはじめて指摘されたのは、福建師範大学の徐恭生教授である（「鄭和下西洋与『衛所武職選簿』」（『鄭和研究』1995年第1期、総第24期））。徐教授は『錦衣衛選簿 南京親軍衛』のなかから鄭和の遠征にしたがった27名の事績を抽出し紹介された。筆者は、1995年8月中旬から下旬にかけて中国第一歴史檔案館で同資料を直接閲覧する機会を得、精査した結果、徐教授が指摘された鄭和にしたがった人名をさらに補足することができた。

同館に所蔵される『錦衣衛選簿』は、ほぼ縦45.6cm、横42.3cmで、萬曆二十二年（1594）修本である。以下は、中国第一歴史檔案館に所蔵される「衛所武職選簿」の目録である。

○ 中国第一歴史檔案館「武職選簿」目録

1	社軍前衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
2 之一	錦衣衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
2 之二	錦衣衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
3 之一	金吾衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
3 之二	金吾衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
3 之三	金吾衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
4	羽林前衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
5	燕山前衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
6 之一	燕山前衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
6 之二	燕山前衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
7	武弓驤衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
8	長陵衛泰陵衛選簿	親軍上二十二衛	1冊
9	南大陵衛選簿 内付牧写所	親軍上二十二衛	1冊
10	留守右衛選簿	右軍都督府	1冊
11	長弓奇右衛選簿	左軍都督府	1冊
12	瀋陽左衛選簿	左軍都督府	1冊
13	定海衛選簿	左軍浙江都司	1冊
14	三万衛選簿	左軍遼東都司	1冊

1 5	定遠衛選簿	左軍遼東都司	1 冊
1 6	萊州衛選簿	左軍山東都司	1 冊
1 7	宣州衛選簿	右軍直隸都司	1 冊
1 8	西安左衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
1 9	平涼衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 0	甘州中護衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 1	安東中護衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 2	寧夏前衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 3	鎮番衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 4	寧夏中屯衛選簿	右軍陝西都司	1 冊
2 5	成都左護衛選簿	右軍四川都司	1 冊
2 6	大渡河守禦所選簿	右軍四川都司	1 冊
2 7	寧番衛選簿	右軍四川都司	1 冊
2 8	越雋衛選簿	右軍四川都司	1 冊
2 9	桂林右衛選簿	右軍廣西都司	1 冊
3 0	柳州衛選簿	右軍廣西都司	1 冊
3 1	南州衛選簿	右軍廣西都司	1 冊
3 2	雲南右衛選簿	右軍雲南都司	1 冊
3 3	雲南右軍選簿	右軍雲南都司	1 冊
3 4	臨安衛選簿	右軍雲南都司	1 冊
3 5	雲南後衛選簿	右軍雲南都司	1 冊
3 6	大羅衛選簿 付鳳梧守禦所、樞關守禦所 武士定(守?)禦所	右軍雲南都司	1 冊
3 7	平越衛選簿	右軍貴州都司	1 冊
3 8	安南衛選簿	右軍貴州都司	1 冊
3 9	留守中衛選簿	中軍都督府	1 冊
4 0	神策衛選簿	中軍都督府	1 冊
4 1	高郵衛選簿	中軍直隸	1 冊
4 2	除州衛選簿	中軍直隸	1 冊
4 3	蘇州衛選簿	中軍直隸	1 冊

4 4	金山衛選簿	中軍直隸	1 冊
4 5	歸德衛選簿	中軍直隸	1 冊
4 6	皇陵衛選簿	中軍中都留守都司	1 冊
4 7	懷遠衛選簿	中軍中都留守都司	1 冊
4 8	龍弓讓衛選簿	前軍都督府	1 冊
4 9	黃軍衛選簿	前軍湖廣都司	1 冊
5 0	沅州衛選簿	前軍湖廣都司	1 冊
5 1	清浪衛選簿	前軍湖廣都司	1 冊
5 2	平溪衛選簿	前軍湖廣都司	1 冊
5 3	承天衛選簿	前軍興都都司	1 冊
5 4	福州衛選簿	前軍福建都司	1 冊
5 5	建寧左右衛選簿	前軍福建都司	1 冊
5 6	汀州衛選簿	前軍福建都司	1 冊
5 7	留守後衛選簿	後軍都督府	1 冊
5 8	興武衛選簿	後軍都督府	1 冊
5 9	大寧中衛選簿	後軍都督府	1 冊
6 0	富峪衛選簿	後軍都督府	1 冊
6 1	忠義前衛選簿	後軍都督府	1 冊
6 2	義勇右衛選簿	後軍都督府	1 冊
6 3	義勇後衛選簿	後軍都督府	1 冊
6 4	永平衛選簿	後軍直隸	1 冊
6 5	密雲後衛選簿	後軍直隸	1 冊
6 6	興州左屯衛選簿	後軍直隸	1 冊
6 7	延慶衛選簿	後軍直隸	1 冊
6 8	廬龍衛選簿	後軍直隸	1 冊
6 9	德州衛選簿	後軍直隸	1 冊
7 0	天津衛選簿	後軍直隸	1 冊
7 1	保定左衛選簿	後軍大寧都司	1 冊
7 2	保定前衛選簿	後軍大寧都司	1 冊
7 3	營州中屯衛選簿	後軍大寧都司	1 冊

7 4	宣社前衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 5	宣社左衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 6	開平衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 7	保安衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 8 之一	蔚州衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 8 之二	蔚州衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
7 9	振武衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
8 0	鎮西衛選簿	後軍萬金都司	1 冊
8 1	鎮虜衛選簿	後軍山西都司	1 冊
8 2	玉林衛選簿	後軍山西都司	1 冊
8 3	雲川衛選簿	後軍山西都司	1 冊
8 4	羽林衛右衛選簿	南京親軍衛	1 冊
8 5	社軍右衛選簿	南京親軍衛	1 冊
8 6	錦衣衛選簿	南京親軍衛	1 冊
8 7	天策衛選簿	前軍都督府	1 冊
8 8	豹韜衛選簿	前軍都督府	1 冊
8 9	豹韜左衛選簿	前軍都督府	1 冊
9 0	留守後衛選簿	前軍都督府	1 冊
9 1	鷹男衛選簿	前軍都督府	1 冊
9 1 之一	鷹男衛選簿	前軍都督府	1 冊
9 1 之二	鷹男衛選簿	前軍都督府	1 冊
9 1 之三	通州衛選簿	(不明、後軍都督府)	1 冊
9 1 之四	保定中衛選簿	後軍大寧都司	1 冊
9 2	瀋陽群牧所襲替世系簿	萬曆三十一年殘	
9 3	新官襲職選底	天啓元年、四年殘	
9 4	新官襲職選底	天啓二年殘	
9 5	新官襲職選底	天啓二年殘	
9 6	優級優養簿	天啓三年	
9 7	選過替職官舍簿	天啓三年至五年殘	
9 8	選過優級優養簿	天啓七年至崇禎二年	

99	選過襲替復職併職優級優養簿	崇禎二年残	
100	選簿残頁	1包	
101	兵部行俊簿	天啓四年	
102	朝鮮迎接天使都監都庁儀軌	萬曆三十六年	
103	朝鮮迎接天使都監都庁儀軌	天啓元年	

以上が、中国第一歴史檔案館の「武職選簿」の所蔵状況である。この目録中のものでこれまで研究者の間で一般的に知られていたのは、目録の102、103の『朝鮮迎接都監都庁儀軌』で、萬曆三十六年の分が『文献叢編』第12輯～第16輯に連載され（翻印98葉。〈影印本〉台湾・台聯国風出版社、1964年3月、363～411頁）、天啓元年の分は、一冊本として出版された（『朝鮮迎接都監都庁儀軌 明天啓元年』〈北平故宮博物院編、民国二十一年一月翻印、全93葉〉）。後者の序文に、北平故宮博物院が「清内閣大庫の檔案を整理中に、明代の朝鮮迎接都監都庁儀軌二冊を発見した。一は、萬曆三十六年、朝鮮国王李公が没した際に中国が派遣した祭事に関するものであり、一は天啓元年に熹宗（天啓帝）即位時の際、朝鮮に頒詔したときのものである」とあるような事情で発見された両書を翻印したのである。中国第一歴史檔案館では、現在両書を明檔の「武職選簿」中に分類しているが、後述の『錦衣衛選簿』とはその書写形式を異にする簿冊である。

我が国では、これまで牧野巽氏、川越泰博氏、楠木賢道氏等によって「武職選簿」に関する、またはそれを用いた研究がされてきた。その中心となったのが戦前に故宮博物院にて書写され、現在東洋文庫に所蔵される11冊の「武職選簿」であった。しかし、さきの目録にみられるように、中国第一歴史檔案館にはそれに十倍するものが現存しているのである。

3 対外関係史の史料としての「武職選簿」

「武職選簿」にはすでに先学によって指摘されているように、兵制のみならず、多くの分野に関する興味深い記事が大量に含まれている。紙幅の関係から、今回は中国第一歴史檔案館で閲覧した数冊の中から対外関係史に関する若干の記事を

紹介したい。

○ 2 之二 『錦衣衛選簿 親軍上二十二衛』

高肇、原籍遼陽人、一世祖把兒帖兒、於洪武年間歸附、選充小旗、二世祖把台（以下数字分破損）〔永〕樂年間隨駕、陞試百戸、十一年往撒馬兒干公幹、十三年往撒馬兒干（以下数字分破損）千戸、十六年往撒馬兒干公幹、陞指揮僉事、十八年往馬兒干公幹、陞指揮同知、……（破損数字分）〔正統〕十四年彰義門外陣亡……曾祖把瑛……（弘治）八年改姓高瑛……

高肇の二世祖は、永樂年間に4回もティムール朝（1369—1508）の首都サマルカンド方面への使者に随行していた。さらに別の祖先は、正統十四年（1449）に、オイラトのエセンの北京皇城攻撃の際に、彰義門の戦いで戦死している。史上有名な土木の変の時期である。高肇の一族の事績には、世界史上に著名な事件等に関係していることが知られる。

○ 5 0 『福州右衛選簿』の例として倭寇の制圧に関係した人物をあげたい。

隆慶五年十月、鄭文恩、年五十四歳、合肥県人、福州右衛指揮同知、今疾患在衛、有嫡長男、鄭紹偉、見年三十一歳、告替、查伊父鄭文恩、原襲指揮僉事、隆慶元年、征倭寇、部下獲功例、不准襲、今本舍、照例革替。

鄭文恩は、隆慶元年の倭寇の襲撃を制圧した功績で昇進したが、それは部下の功績であるとして嫡男鄭紹偉への襲位が認められなかった。倭寇襲撃時の鄭文恩の功績がどのようなであったかは不明であるが、この記事から鄭文恩が指揮僉事として倭寇制圧に関わっていたことは明らかであろう。

○ 7 0 『天津衛選簿』の一例としては次の例をあげたい。

楊宣、寿州人……景泰元年、徳勝門等处殺賊獲功、天津右衛指揮同知、陞指揮使。

楊宣の場合は、景泰元年（1450）のオイラトの北京皇城攻撃の際に功績を挙げて昇進している。同選簿には景泰元年頃のオイラトの攻撃の際に功績を挙げたり、逆に戦死した人物に関する記事が多く見られる。

○ 8 6 『錦衣衛選簿』中に見える鄭和の遠征に従事した人物の記事は徐教授が指摘されているが、実例として『錦衣衛選簿』の最初の例を挙げたい。

何義宗、江都県人、先因年間為兵革随父何仲賢、到於占城充目、洪武十九年差做通事、跟占城王子、管領船隻、到京回還本国、二十年仍同使臣進象欽賞

段疋、回至広東、蒙勘合取回、二十一年欽留提調操、練象隻、撥充錦衣衛中右所總旗、三十年占城国招諭、引領占領王子等、赴京朝見、三十五年往瓜哇国、永樂元年回還、欽陞錦衣衛馴象所百戸、八月往西洋等国、三年回還、陞馴象所副千戸、本年欽授流官職事、八月往西洋等处公幹、四年旧港・阿魯等处殺賊衆、五年陞本衛所正千戸、十一月瓜哇・西洋等处公幹、七年復選下西洋、八月敬陞本衛指揮僉事。

何仲賢は、占城国の騒動に関係してジャワに派遣されるなど、永樂元年、三年、五年、七年と4回にわたって西洋諸国に派遣されている。これまでの鄭和研究に見られない興味深い史料である。

4 小結

以上、中国第一歴史檔案館に所蔵される『武職選簿』のごく一端を紹介しただけであるが、さらに所蔵されている選簿の量からみて、まだまだ多くの興味深い史実を発見することも可能であろう。なお、上の4件の選簿中にみえる鄭和関係の記事については別稿を用意しているので、詳細はそれに譲りたい。

〈特集3〉

『礼科史書』中の理藩院題本

楠木 賢道

はじめに

清代史研究においては、内閣檔案・宮中檔案・軍機処檔案・内務府檔案など、紫禁城内で作成・蓄積されていた檔案が膨大な量残っており、研究者に利用されている。これに対して、清代に紫禁城外の在京部院で作成・蓄積された檔案を